

学習指導要領が求める言語活動

令和2年度鳴門教育大学小学校英語教育センターシンポジウム基調講演

大城 賢 (OSHIRO Ken)

琉球大学 名誉教授

皆さん、こんにちは。今、佐藤先生から紹介をいただいた琉球大学の賢と申します。大石理事からもご丁寧な紹介をいただきまして恐縮しております。

徳島は何度も足を運んで、多くの知人・友人がおります。今回もぜひ交流ができたらと思っていたのですが、コロナ禍ということもあって、オンラインでお話をさせていただくことになりました。

鳴門教育大学は、教員養成系大学の中でも全国に先駆けて、「小学校英語教育センター」を立ち上げられました。私は羨ましいなと思いながら遠くから見しておりました。

今、大きく英語教育が変わろうとしています。今回の改訂により、小学校には教科として外国語科が導入されたのですが、これまでの間、現場の先生方が困ったり悩んだりされている中で、地域に「小学校英語教育センター」があるということは、先生方にとってどれほど心強いことかと思えます。これまでの小学校英語教育センターの地域への貢献に、心より敬意を表したいと思えます。その小学校英語教育センターの主催するシンポジウムにおいて、講演の機会をいただいたことを大変嬉しく思います。

今日のテーマ「新学習指導要領が求める言語活動」ですが、新しく定義された「言語活動」というのがまさしく鍵、キーポイント、キーワードだと思います。この「言語活動」がどういうものであるかという理解なしに、学習指導要領の目標を達成することはできないのではないかと考えています。これは、指導観“teachers' beliefs”を変えるということです。これまでの英語教育の指導観というのでしょうか、こういうふうに学ぶべきだ、あるいは学んできたというこれまでの経験に縛られていることが多いのですが、それを解き放って新しい指導観が求められているのではないかと思えます。3月に『指導と評価の一体化』の参考資料が出ました。これなどを見るとまさしく指導と評価は一体化されなければならないというのを強く感じます。

評価観もまた見直す必要があると思えます。併せて指導も改善していく必要があるということを感じたので、「～迫られる指導観と評価観の見直し～」というのをテーマに加えました。これは、今、とても大切にしたいことです。同じようなことを10年以上もやってきた気がするのですが、変わっていないと感じます。改めて、私自身が外国語教育に携わってきたこれまでの人生の中で、一番大切だと思っていることを話します。

まず、「外国語の学習は言葉の学習であること」ということです。逆に言うと、これまでの中学校や高等学校、あるいは大学も含めて、言葉の学習になっていたかということを考えてみたいです。私たちが受け

てきた外国語の授業は、言葉の学習になっていたでしょうか。

次に、「言葉の大切な役割はお互いの考えや気持ちを伝え合うこと」だということです。これは、最も重要な言葉の役割だと思います。外国語であっても言葉です。つまり「これまでの中学・高校の授業において、自分の考えや気持ちを言葉に乗せてやりとりをする時間があつたか」ということです。

私は、大学でも共通科目の英語を教えています。1年生の「College English」という授業をもっています。毎年、学生に聞きます。「君たち、これまで英語の授業で自分の考えや気持ちを伝え合うということがあつた?」、そうすると皆考え込みますね。「スキットをやった」という答えが返ってきます。スキットとは、決められた文があり、その人になりきって言うものです。「そのスキットには自分の考えは入っていた?」、「いや、入ってなかった。」

「ディベートをやった」という学生もいます。でも「トピックは自分で選んだ?賛成か反対かって自分で選んだの?」と聞くと、「うーん?」という反応があります。さらに「何回ぐらいやったの?」、「年に1回」、「そうか、普通の授業はどうだった?」、「うーん、教科書の内容に答えたり、Question&Answerをやったりした。でも“What do you think?” 「あなたはどう思うの?」というのはあまり聞かれなかった。毎年ほとんど、こういった変わらない反応が返ってきます。

これまでの英語教育は、言葉の学習になっていたのか、お互いの考えや気持ちを伝え合うということが出来ていたのかと感じたりするのです。早くこういったことを言わなくてもいい時代が来ることを願っているのですけれど。

そして、3つ目は「言葉は人と人をつなぐ役割がある」ということです。小学校でも“Hello, How are you?”から始まります。なんで挨拶するのですか。

日本語でも、人とつながる最初の言葉が挨拶ですよ。挨拶をしないで人と人がつながることはありません。外国語であっても同じです。人と人をつなぐという挨拶の役割を、果たして授業の中でどのぐらい子どもたちや生徒たちに伝えてきたのかということです。

教室は言葉を学ぶ場であると同時に、実際に言葉を使う場ですよ。自分の考えを言うことは教室以外でも求められます。教室で練習しておくとか、やっておくということがとても大切だと思います。日本語でも同じかもしれません。世の中に出て自分の考えをしっかりと述べる。そして相手の話をしっかりと聞く。そういうことはとても大切です。世の中がグローバル化していく中で、互いの気持ちや考えを聞き合う、対話する、対話の重要性がこれほど求められている時代はない、そしてこれから更に求められているのではないかと思います。

私は、対話が平和な社会を創る鍵だと思っています。粘り強く対話をする。その対話能力の基礎をつくる場所が小学校です。そして、国語でも他の教科でも言葉を学ぶのだけど、正面から取り上げる教科が外国語だと考えています。

学習指導要領に書かれている広い意味のコミュニケーション能力、「相手に配慮しつつ自分の考えを述べる」ことを外国語は正面から扱っていきます。これほど重要なものはない。他の教科ももちろん重要であるけど、外国語はとても重要な役割を担っている。その重要性というのはどんなに高く評価しても評価し過ぎることはないと思います。

さらに「英語は気持ちが9割であること」と書かれています。日本語であれ外国語であれ、気持ちというのは言葉とつながっていると痛感します。私は、先ほど紹介したように、沖縄で生まれてほとんどの人生を沖縄で過ごしてきました。東京にいたのはわずかな期間です。

1972年に沖縄は祖国復帰ということで、本土に還っていきます。沖縄が一つの県になります。私は、復

帰が完了した 1973 年に高校を卒業しました。そして東京に行きました。そこではじめて言葉が出てこない “no word came out from my mouth” という体験をしました。言っていることは全部わかるけど、隣の友達に質問することができない。ましてや先生に手を挙げて質問するなんてできない。なぜかという、自分の発音に自信がない。沖縄の方言をよく使っていたし、沖縄のアクセントがとても強かったから言葉が出てこないんです。自分の考えを伝えられない、それは辛いですね。辛いんだけど出てこないんですよ。気持ちというのは大切です。

英語教育を少し研究するようになってから、ふと気付きました。私たちが英語を話す時もひょっとしたら東京に行って日本語が出なかった私のように、何か自信がない、発音が心配だという気持ちがとても強いのではないかということに気が付きました。もちろん「正確さ」は重要なことではあるけれど、あまりにも強く出すと私たちは一言も発せなくなってしまいます。日本語もそうだと思うのですが、英語の場合はなおさら気持ちを整えるということが大切です。ですから、気持ちのよい教室をつくるということはとても大事です。

私は飲み会が大好きなのですが、アルコールが入ると色々喋りたくなる。これまで喋ったことがないことまで喋る。おそらくアルコールが多少入ると気持ちが変わっていくのでしょうね。リラックスする。そうすると気軽に話し合える。英語の勉強は、アルコールを飲みながらやったらいいのかもしれませんが、そういう訳にもいかない。小学生は飲まなくても飲んだような感じかもしれませんが……。とにかく気持ちが 9 割だから気持ちもつくってあげるということは、とても大切だと思います。

英語の発音については、矯正から共生へと考えること、つまり「直す」ということから「一緒に生きていく」ということに切り替えることです。私も長いこと英語の勉強をしていますが “still I have some Japanese accent” どうしても日本語のアクセントが抜けないということがあります。でも、チャイニーズが英語を喋ってたらチャイニーズイングリッシュになるのは当たり前。コリアンが話したらコリアンイングリッシュになるのは当たり前。ジャパニーズが話したらジャパニーズイングリッシュになるのは当たり前。だから自分たちの “This is my English.” という気持ちをもつことが、とても大切ではないかと思っています。

私が大学生の頃は、英語と言えば **native speakers** と話すことが想定されていましたが、ご存じのように、現在では **non-native speakers** と話すことが多いんですよ。むしろ、相手もネイティブではないからそういう中で英語を使っていく。そこを前提にしながら、この発音の問題について考えていけばいいのではないかと思います。

「私は少し日本語のアクセントがあるけど許してね。あなたの英語も少しなまりがあるけど、お互いそれを認め合いましょう。」という気持ちで英語に接していくことが重要ではないかと考えています。そして当たり前のことですが、「外国語教育は教育の一環であること」ということです。これまでの英語教育というのは人を育てていたのかと考えてみてください。少し大袈裟な言い方ですが、人は言葉で育っていきます。もし言葉の教育となっていないならば、英語教育では人は育ってなかったかもしれないというのが私の考えです。英語教育が言葉の学習でなかったとしたら、それは人を育てる教科にはなってなかったかもしれないということですね。

でも、後でも紹介しますがけれども、今小学校ではとても心温まる、何て言うんですかね、この授業で子どもたちは豊かな心が育まれるだろうな、今まで話したことの無い人と話してみてもっと話したいと思っただろうな、褒められて嬉しいだろうな、もっとやろうと考えたんだろうな、というような授業を見ることがあります。とても幸せな気持ちになります。

今まで話してきた内容が、現在私が大切にしていることです。ここまで言えたら、後はオンラインで何かトラブルが起こってもいいかな、というぐらいの気持ちでお話をさせていただきました。さて、その続きと言ったらなんですけれども、学習指導要領ですね。ぜひ時間がある時に、当然見ているとは思いますが、時々見るのがとても大切だと思います。学習指導要領が出た年は、どなたもよく見るのですが、何年か経ってくると教科書だけを見てしまって、「目標は何だったっけ？」となって、どういうことをやればよいのかわからなくなってしまう時があります。ですから絶えず目標のところや言語活動のところを見直す、読んでおくということが大切です。特にまだ小学校の外国語は完了した訳ではなく、今年 2020 年が教科化の初めての年なんですね。まだ「家」としては完成してないということですね。完成してないから設計図を絶えず見直す。設計図がまさしく学習指導要領ですね。どんな家を作るのか、こんな家を作るというのが書かれている。それを絶えず見ながら、大工さんは建物を、家を作っていきますよね。

私たちも同じで、「完成するまでは絶えず設計図をきちんと見ること」が授業をよいものにしていくのではないかと思います。ちょっと話が脱線しましたね、ごめんなさい。話しているうちにいろいろなことが言いたくなります。申し訳ないです。

先ほど私が話した内容とも重なるのですが、実は学習指導要領にもとても素敵なことが書かれているんですね。これは外国語活動の指導要領解説にあります。特に私が素晴らしいな、小学校で大切にしたいなと思うところです。「何とか相手の思いを理解しようとしたり…」という気持ちを外国語活動はつくっていくものだと言っているのです。

何とか相手の思いを理解しようとする。これからの子どもたちが出会う社会は、英語を話す人だけとは限らない。どんな人であっても、相手の話を聞こうとする態度をつくっておくということは、とても大切だと思います。相手の思いを理解しようとする態度です。そして「自分の思いを何とか伝えようとする体験」、これは粘り強く伝えるということですよ。伝わらなかったから終わりではなくて、ジェスチャーを使ったり絵に描いてみたり、まさしく小学校の授業では多く試されている。「何とか伝える」ということです。外国語であるがためにうまく伝わらないもどかしさはある。それでも諦めずに伝える。ALT にも頑張っている。ALT の話もしっかりと聞く。そうしたことが、これから子どもたちが社会に出て行った時に必要となる資質能力となっていくのではないかと思います。

さらに、「日本語を含む言語でコミュニケーションを図る」と書いてありますよね。小学校の外国語活動は、英語だけを考えるというよりも日本語を含む広い意味のコミュニケーションの資質・能力を育成することに資するというわけです。これを忘れてはいけないと思います。大切なことですからね。絶えずこのようなことも念頭に置きながら、今日の授業はそこにつながるものになっているのだろうか、と考えて授業づくりをして欲しいと思います。

さらに「友達との関わりを大切にしたい体験的な言語活動を行うこと」と書いてあります。ですから、友達との関わりを大切にしたいような言語活動がなければ目標は達成されないということです。私は、学習指導要領のこの部分がとても良いなあと思っていつも見えています。今回も再度確認しました。

高学年の方でも同じようなことが書かれていますね。教科であっても「広く言語教育として、国語科をはじめとした学校におけるすべての教育活動と積極的に結び付けることが大切である」と書いてありますね。広く言語教育として、国語とも連携しながら子どもたちの対話力を高めていくということですよ。これはもう学級担任の先生に関わってもらわないと実現できないですね。学級担任の先生の役割はとて大きいと思います。「すべての教育活動と積極的に結び付ける」ということも、担任の先生に関わってもらわないとできないですね。

そして、自分の本当の考えや気持ちを伝え合うということです。しかも身近な話題についてです。身近な話題というのは、子どもにとっては、行事とか他教科でしょうね。学校生活は、朝8時半ぐらいから登校して放課後まで長いですからね。だから、身近な話題とは、教育活動、学校行事、遠足のこと、スポーツフェスティバルのこと、家庭科で学んだことなどを、英語・外国語教育の中に入れていくということが、とても大切なことだと思います。それができるのは誰かということです。ぜひ担任の役割に期待したい。担任の先生は、とても大きな役割を担っているのではないかと思います。

外国語教育、外国語活動、外国語科は、先ほども話したように言葉を正面から扱う教科だと思います。加えて、コミュニケーションについて考える教科だと思うんですね。それはとても大切なことだと思うんですよ。「言葉の大切さや豊かさに気付いたり」ということも書かれています。学習指導要領解説 125 ページです。

そして、「これを尊重する態度」という、それぞれの言語はそれぞれの価値がある。日本国内であっても沖縄の方言であっても、それなりの伝統があって価値がある。今の沖縄の若い子どもたちはそれほどコンプレックスを感じてないけれど、私の時代の沖縄の人たちは、本土から27年間もの長い間引き離されていたということもあり、教育も遅れていたし、何か勉強しても勝てないというようなこともあったし、否定感情が強かった。自分たちの文化はダメなんだ、だから共通語を話そうという感情です。共通語を話そうというのは、逆に言うと私たちの方言を捨てようみたいな気持ちがどこかにありました。でも、アクセントだけが問題なのではなく、私がそうだったように、文化にも伝統にも自信がもてないと言葉が出てこないというのがありましたね。

小学校でよくやりますけれども、例えば地域紹介、自分の地域を紹介するという活動などはとても大切です。子どもたちが自分の地域に自信をもつ。この前も、こんな授業を見ました。新しく来たALTにこの地域をわかってもらうために、どんなところを紹介しようかという授業でした。外国語の表現を覚えるだけが外国語の授業であるということではなく、子どもたちが地域のことを再発見し、それを自信にしていくなプロセスを見ることができて嬉しい気持ちになりました。

相手を尊重する態度、相手が話す英語に対してもしっかりとリスペクトするということですよ。言葉の教育では、「あなたは発音が悪いからもう喋るな」とか「あなたの言うことは聞かないよ、発音が悪いから」などという時代を経験したというのが私の世代だと思うんですけどね。そんなことはもうなくしたい。「誰でも自分が言いたいことは言っているよ」「間違えてもいいよ、気持ちを素直に表現して」という、そんな外国語教育になればいいなと思います。

前置きが長くなってしまって申し訳ないです。いろいろなことを思い出して言ってしまいました。さて、今日お話したいのは、第1に再定義された言語活動、そして第2に言語活動を中心とした授業の構想、そして第3として小・中・高の連携を踏まえた言語活動の留意点です。時間があれば、第4として評価観の見直しについても先生方と一緒に考えていきたいと思っています。

これは「外国語活動・外国語の目標の学校段階別一覧表」というものです。学習指導要領の後ろの方についていますね。素晴らしいですね。いつもこれを見直すということによって、大きな地図を見ることができる。小・中・高を踏まえて、大きな外国語教育の鳥瞰図を見ることができる。

ここは、すべて「言語活動を通して」となっています。外国語活動も外国語も、中学校の外国語も高校の外国語もそうです。一番最初の方に「言語活動を通して」と書いてあるんですよ。言語活動を通して指導すると言い換えてもいいですね。

そして、ここが皆さんもよくご存知の“素地”というところですね。素地って何ですか？ これをよく

理解しておくことが、とても大切だと思います。素地、基礎ですね。素地というのは、「後で付け加えると完成する基になるもの」広辞苑の説明なのですが、ぴったりですね。あとで付け加えたら完成する。今、この時点では完成していないかもしれない。でも、教科になって付け加えたら完成するのが“素地”ですね。素地となる資質・能力を次の通り目指すということで、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」というのが、この言語活動を通して育成されるという大きな学習指導要領の作りになっている。ですから、「言語活動を通して」と、小・中・高、一貫しているんですね。「言語活動を通して」ですから、「言語活動」が学習指導要領の目標が実現するかどうかのカギということになります。

言語活動というのは他の教科でもあるものです。英語教育でもこれまでも使っていたんです。使っていたけれども、再定義しています。その理由は、またこれから話していきたいと思いますが、「言語活動の再定義」ということで、これ先生方はもう何度も見ておられると思いますが。

研修ガイドブックの中に、かつては外国語活動が必修化になった時は、これは冊子になって出ましたけど、今回は、一部冊子にしていますが、冊子にせずネットダウンロードして使う形になっていますね。その中に、言語活動の定義が書いてあります。これは文部科学省が責任をもって出している『外国語活動・外国語研修ガイドブック』、研修用に使うものです。ですからそこで書かれていることは当然、この定義が学習指導要領でも生きるということですね。

中学・高校でも同じように考えるということがもちろん大切なことです。小学校ではこのように定義して、高校では別の定義をするなんてことはありませんね。外国語言語活動を定義したら、それは小・中・高とその定義で使われていく。

ここの赤いところをちょっと見てください。先ほどから言っているように「互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動」と書いてありますね。互いの考えや気持ちを伝え合うというのが言語活動なんです。先ほど言ったように、言語活動を通して、「思考力、判断力、表現力等」というものが育成される。「思考力、判断力、表現力等」これは言語活動を通さないと育成されないということです。「一方で、英語を用いているが、考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動も言語活動とは言い難い」とあります。さっき話した覚えたことを言うスキットとかがそうですね。英語を確かに喋っている、話しているけど、それあなたの考えかという、そうではない。これは言語活動とは言い難いと書いてあります。

そして「練習は、言語活動を成立させるために重要であるが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある」ということ、ここは大切です。練習は不要だと言っている訳ではないですよ。でも練習は、それだけで終わるといえることが多いので注意してくださいということです。このことを充分に理解する必要があります。練習で終わる授業になっていたと思うこともあります。練習を言語活動と認めているのなら、あと一步、踏み出さないといけないのではないかと思います。

さて、言語活動の再定義なのですけれども、「再定義された言語活動を行うには目的・場面・状況等を明確に」ということが大切です。これがないと言語活動はむしろ行えないかもしれないということです。

「言葉は目的・場面・状況の中で使われてこそ意味をもつ。目的・場面・状況が設定されていなければ、互いの考えや気持ちを伝え合う活動などできる訳がない。このことは、5領域すべてに当てはまる。書くことにおいても、目的・場面・状況を明確にした言語活動を通して行うことが重要である」と、私は考えています。

これまで行われてきた英語の授業を少し見てみましょう。例えば“You have money.”これを疑問文にするとどうなりますか。“Do you have money?”と聞きます。答えは一般動詞の文ですから“Yes, I do.”“ No, I

don't.”で答えます。ちょっと大袈裟に言えば、これまでは文構造を中心に指導してきました。今は随分変わってきていますけれども。

この“Do you have money?”というのは、一体どんな時に使うのかということを考えて学ばないと、本当の意味で使った、使えるということにはなりません。例えば、会場にいらっしゃる先生方、本当は時間を取ってペアになり話し合っただけのところですが、こういう中ですから話し合うことができませんのでちょっと考えてみてください。“Do you have money?”というのは、どんな時に使うのでしょうか。ちょっと1分ぐらい考えてみてください。

どうでしょうか、“Do you have money?”って、どんな場面で使いますか。いろいろ考えられると思います。これは和泉伸一先生の本の引用ですが、例えば、友達と一緒にレストランに入ろうとしたけれども、入口で財布を忘れたことに気付いた人が「あっ、お金持ってる？」という時に“Do you have money?”と聞くでしょうね。それに対して、どのように答えたらいいのでしょうか。

あるいは、こういう時もあるかもしれないですね。大学生の娘が、朝、家を出る時に、“I'm going out for dinner with my friend tonight.”「今日はお友達とレストランに行くことになっているよ」と、お父さんに言ったとします。優しいお父さんは、“Do you have money?”と聞くかもしれないですね。この場合は「お金大丈夫？」という意味ですよ。

こういう場合もあるかもしれません。強盗が来て、その時“Do you have money?”これは「お金を出せ」という意味です。つまりここで言いたいのは、場面によって意味が違うということです。“Do you have money?”は、「お金を貸して欲しいのだけど、持ってる？」という場合もありますし、「お金は大丈夫？」という場合もあります。あるいは「金を出せ！」という意味もあります。

この時に、例えば“Yes, I do.” “No, I don't.”で答えるというのを教えた場合ですね、これどうでしょうか。「金を出せ」という意味で“Do you have money?”と言われて“Yes, I do.”と言えますか。これは、おそらく反応の仕方が違いますよね。言い方も違います。お願いする時は、本当にお願いをするような言い方をします。「大丈夫？」という時は、大丈夫？という気持ちを込めて言います。「金を出せ！」という命令の場合は、大声で言うかもしれません。

つまり子どもが自分の気持ちを込めて言う時は、目的・場面・状況がないと気持ちの込めようがないということです。先ほども言いましたが、言葉は気持ちと一体ですよ。そうすると、言語活動を通して学ばないと本当の使い方がわからないということです。

言葉の役割は3つ、形式と意味と機能から成っているとよく言われます。形式というのは形ですね。疑問文を作る時はdoを前に持ってくる。そして「お金を持っていますか？」という意味です。でも、実際は意味だけじゃなくて機能の方が大切だということです。これらを合わせて学ぶことができるのは、言語活動を通してのみです。それを通さないとできません。ですから、言葉が命を持つためには、言語活動を通さないといけないということです。

先生方のハンドアウトには別の例を書いています。“Do you have a pen?”という例です。私が中学校で教えていた時は、まさしく文構造を中心に教えていました。「Do you have a pen? これは疑問文です。答えはYes, I do.ですよ。わかりましたか。はい、言ってみよう。Do you have a pen?」何度も何度も言います。そして、持っている時は“Yes, I do. Yes, I do. Yes, I do.”、持っていない時は“No, I don't. No, I don't. No, I don't.” repeat, repeat, practice, practice というように構文を覚えさせました。

これは本当にあった話なんですけど、ある日、ALT が来て、ペンを持ってなかった。そして一番前の生徒に、“Do you have a pen?” と聞いた。この男の子、得意そうに “Yes I do.” と答えて終わり。これって

コミュニケーションになっていますか。

まさしく私がやっていた授業の弱点です。目的・場面・状況の中で使っていないから、“Do you have a pen?”が、場合によっては「ペンを持ってたら貸して」という機能があるということに気付く授業になってなかったということですね。ここは“Here you are.”と言って貸すべきところなんですね。これがまさしく目的・場面・状況を設定するという意味です。それを設定しないと“Here you are.”なのか何なのか、何と答えていいのかがわかりません。

私もよく講義室の後ろでボーッととしてノートも取っていない学生に“Do you have a pen?”と聞きます。“Yes I do.”と答えようものなら、チョークでも投げたい気持ちです。「書きなさい」という意味であなたに注意しているんだから、「Yes I do.じゃないだろう!」「I'm sorry.”ぐらい言わないとダメですよ。

このように、目的・場面・状況を設定した上で言葉を学んでいくということです。これが言語活動の再定義なのです。だから、学習指導要領にこれを通して学ぶと書いてあるのです。素晴らしいですね。

これまでの言語活動は、練習という意味も入っていた。でも今回は、練習は入っていない。分けて考える。練習だけで終わって言語活動をしたということであっては困るということが、その背景にはあるのではないかと思います。

言語活動を通して学ぶ。そうすれば言葉が本当の言葉としての学習になるということですね。だから言語活動を通して学ぶメリットは、言葉の機能を加えることができるということです。目的・場面・状況がない限り、言葉は生きたものにはならないと言ってもいいでしょう。生きた言葉として学んでいくというのが、言語活動を通して学ぶという意味です。しかも小学校から高校まで一貫して学ぶという訳ですね。日本の英語教育が、変わって欲しいですね。ぜひ変わって欲しい。でも、これをやらないと変わりません。

もう1つ、言語活動を通して学ぶメリットを付け加えておきたいと思います。例えば、先生がALT と対話しながら内容をつかませていくというのをやりますね。“I get up at seven.” “I have breakfast at eight.”とかね、こうやって一日の流れを言うというのをやります。

考えてみると、例えば“I get up at seven.”だけを取り出して、「どんな意味ですか？」と聞いても推測のしようがないんです。単独の一文だけでは、言語習得をする時の大切な働きである推測して意味を捉えていく力が養われません。get up というのがわからない子にとっては、何度 get up と発音してもわかりません。ところが、先生が「これから先生の一日を皆さんに言うよ。 I get up at six. I eat breakfast at seven. I go to school at eight thirty. I eat lunch at twelve.」と一日の生活という場面の中で紹介する。自分の生活を紹介するという場面を設定すれば、「ああ“I get up at six in the morning.”は、起きるという意味なのかな？」という推測ができるということです。これはインプットを通して形式に気付くということです。インプットを通して get up は起きるという意味じゃないかと推測する力、これがとても大切でしょう。これまでは英語は、学んでも学んでもなかなか全てがわかるようにはなりませんよね。絶えず何かわからないのがある。一つ一つがわからないと、全てわからないという学習者をつくってしまっていたかもしれない。

いやいや、そうではなく推測しながら聞いていく。だから粘り強く聞くためには、粘り強く聞いたらわかる言語活動をしないとイケないんです。そうですよね。これは「聞く」「読む」を通して文構造・文法に気付くという、そのメリットがあるということですね。これをやらないと力が付かないということです。そして、自分の言いたいことを言う、自分の気持ちや考えを言う。本来なら、人は自分の気持ちを伝えたい。当たり前ですけど、伝えたい。それを何とか言わせるというのはとても大切です。言いたいことを言うという時に、はじめて自分が必要な単語は何なのかとか、自分が言えないことに気付く。これはこっち

に書いてあったかな、“noticing the hole”と言います。「自分の穴に気付く」、わからないところに気付くということです。そのことが実は言語習得を促進するというわけです。

だから、自分が言う、という経験がないと、なかなか自分が必要とする語彙は何なのか、構文は何なのかということに気付かないままに学習が進んでいく。主体的にもなるはずがないということです。簡単なことであっても、自分が言いたいという気持ちがあって、はじめて自分の必要な語彙とか、自分が忘れていたことを思い出すといったことが起こってくる。ですから、「目的・場面・状況」を設定して言語活動をしていくというメリットは、いくら強調してもしすぎることはない。まさにこれこそが英語教育を変えていく鍵ということです。

小学校でも中学校でもよく見る活動の1つに「カッコの中に自分が聞きたいこと（言いたいこと）を入れて対話をしてみましょう」というものがあります。AとBがあって、「A: Hello. B: Hello. A: What sports do you like? B: I like (). ここは自分の気持ちを入れてね。そうしたら次は How about you? と聞いてね。Aさんはまた A: I like (). 自分が好きなスポーツを教えてください」これがどんどん続いています。このカッコに入れる活動をよく見ることがあります。どうでしょうか、皆さん。これは言語活動でしょうか。いやいや自分の気持ちを言っていないから、言語活動ではないでしょうか。実は私もそういった質問を何度も受けました。考えてみると、このやり取りは、型が決まっているんですね。例えば“**What sports do you like?**”と言った時に、スポーツが嫌いだと言いたいの“**I don't like sports.**”がこの場合は言えない。必ず“**I like~.**”で言わないといけないということになっているのです。ちょっとパターン化しすぎていて、自分の本当の気持ちを自由に話すということにはやや無理があるかと思います。“**What sports do you like?**”と聞かれて、例えば聞き取れなかった時は“**I beg your pardon?**”と言いたいけど、言えない形になっているのです。

ここは言語活動とはちょっと言い難いと思っていたところ、文科省の『MEXT channel』では「これは言語活動ではありません」と述べられています。私もそれで安心しました。でも、これで終わっている活動が多いので、じゃあこれをどう位置付けたいのかということになりますね。

「言語活動を通して指導するということは、とても重要だ」とずっと繰り返し言ってきたのですが、はじめから何もなく言語活動を通して指導するというのは、英語だけで授業をする学校で行っているイマージョン教育で行われていることです。実際の小学校や中学校の場面ではなかなか厳しい、難しいと思います。ですから、例に挙げたやり取りは言語活動ではないけれども、授業でこのように位置付けて指導の枠組みを考えるといいと思います。

次に挙げるやり方が言語活動です。例えば「クラスでスポーツ大会をすることになりました。どんなスポーツにするか、お互いに聞き合ってください」という目的・場面・状況があります。どんなスポーツにするのかを聞き合うことが目標です。

ここに至るために、基礎的なことや練習、スポーツで使う単語 **baseball, basketball, tennis** とか“**What sports do you like?**” “**I like baseball.**” など、言語活動で使うであろう語彙や表現に慣れ親しませるという段階が必要ですね。練習から言語活動に移っていくという流れが大切だと思います。

但し、ここにあるように、逆の流れも認める、つまり「使いながら学ぶ、学びながら使う」と考えて、授業・指導の枠組みを考えるといいのではないかというのが私の提案です。言語活動といきなり言ってもなかなか難しい。そのためには、やはりこうした活動を入れる。これを私は「擬似言語活動」と言っています。擬似、似ているという意味です。わざわざこれを入れた理由は、ここで終わる活動が多いので、何か区別しておく必要があるのではないかと考えたからです。

言語活動と区別しておく必要があるのではないかとということで、「擬似」、「知識・技能」ではなくて、両者の間の活動と位置付けて授業を展開していく。そうすることによって、言語活動へもスムーズに移行できます。しかし、後でも述べるように「擬似言語活動」をやり過ぎてしまうと、パターンから抜けられないということもありますので、適当なところで言わせるということが大切です。

あまりにもパターン化に集中してやってしまうと、言いたいことよりも言えることを言う子どもをつくってしまいます。ですから、習っていないものでも工夫をしながらなんとか言ってみるという活動にもっていくのが望ましいのではないかと考えて、この表を今回、提案させていただきました。

既に「やってるよ」と言えばやっていることなんですけども、言語活動というのをしっかりと理解し実践するために、擬似言語活動とはきちんと区別しておくという理由から考えてみました。だから、これはやっちゃダメということではなくて、言語活動に近い場面でやるということは決して悪いことではないのです。但し、さっき言ったような弱点もあるということ踏まえた上でやってみるということなんです。半分は言語活動かもしれないけど半分は違うという理解でやってみて、擬似言語活動で終わってしまうことがないようにしてほしいと思います。言語活動は、決められた表現が示される訳ではなく、どんなスポーツが好きかお互いに聞き合うというレベルで子どもがやり取りするということです。ここでは“**What sports do you like?**”というのをキーセンテンスとして教えることになってはいるけど、別にこれを使わなくても“**Do you like soccer?**”と相手に聞いて、“**No, I don't. I like tennis.**”と言うかもしれない。“**Do you like soccer?**”という質問、既習表現を使っても相手の好きなスポーツを引き出すことができる。これが鍵です。

言語活動(思考力、判断力、表現力等)のところでは、既習表現も使って自分の目的を達成できる。“**I like baseball. How about you?**”これでもいいかもしれない。相手は“**I like tennis.**”と言うかもしれない。このように限られたパターンにある表現のみを使って目標を達成するのではなく、既習表現もふんだんに使って活動をするというところが、またもう1つのポイントだと思います。

実際は“**What sports do you like?**”だけで会話するということはほとんどないし、例えば、今日学んだのは**I can**を使った文だから、**I can**を使ってだけ対応するというのはなかなか難しい。

これまで学んだことを様々に組み合わせたり引っ張り出したりして使うというのが現実の場面で行われることですから、それに近いことを言語活動としてやるというのが今回の学習指導要領の求めていることです。既習表現を使っていくということですね。これがすごく大切だと思います。

先ほどもちょっと言いましたが、私が「擬似言語活動」という考えを持ち込んだ理由は、カッコの中の単語を入れ換えて終わる活動が授業ではふさわしくないと考えているのではなく、これで終わらないようにすることが重要であるということを先生方に伝えたいと思ったからです。もう少し自由度を与えてもいいのではないかとということです。やり過ぎてしまうと、自由な発言が逆にパターン化してしまって、言いたいことよりも言えること、となってしまうので、児童・生徒の実態を見ながら先生方が授業をつくっていくということが重要だと思います。

また、双方向の矢印は言い換えると「使いながら学ぶ」ということを示しています。これが完璧に終わってから次へ進むという訳ではなく、これをやりながらまた戻って来るといった流れをつくるということです。だから「言語活動を通して学ぶ」というのは、「練習してから使う」というこれまでの考え方から、「使いながら学ぶ」という指導観の変更を迫っていると思います。これまでは、練習をたっぷりやって、「はい、やってごらん」という活動が多かったんですけども、やりながら必要なことについては自分の穴に気付く、自分が気付くということが大切です。

あまり練習をやり過ぎると、練習から逆に抜けられないということもあつたりするので、使いながら学ぶという、これだと思います。ですから「使いながら学ぶ、学びながら使う」というやり方に変えられるかどうか、私たちがそこへスイッチする（変更する）ことができるかどうか言語活動が成功するかどうかの分かれ道かもしれない。そして「単元を通して目標を実現する」という考えが、今回3月に出た『指導と評価の一体化』を見ると明確に述べられています。今までもやってきたとは思いますが、指導に生かす評価も含めて、最終的に単元の目標に向かわせるような授業を展開していくことがすごく明確に表されている。

これまでの授業づくりというのは、どちらかというと今日のターゲットセンテンスがあつて、どのように導入して、練習させて、使わせるまでもっていくかという、こういうのが授業研究の1つのパターンでした。中・高ではよくなされるものでした。でも、言葉って教えたらすぐできるようになるとは限らない。それよりも繰り返しながら最終的に使えるようになったという授業を構想することが大切だと思います。これが求められているのが、『指導と評価の一体化』の指導案が載っていますが、それから読み取れるところですよ。だから、単元を通して目標を実現するという考え方をもち、研究授業のやり方も違ってくるかもしれないですね。本時だけで完結するのではなく、一つ一つのストーリーを積み上げて最終的にできるようになるという授業づくりが重要なと思います。

そして、「単元を越えて繰り返し使う」ということです。これまでの英語教育で欠けていたところだと思います。Lesson1 をやる時は Lesson1 だけ、Lesson2 をやったらもう Lesson2 だけ、Lesson3 は Lesson3 だけ、Lesson3 をやる時は Lesson 1・2 のことはもう忘れていくというのではなくて、言葉というのは総合的に使うということが必要なのです。今日は過去形を教えたから過去形だけ使うような言語生活はないですよ。いろいろなものが混ざってくるというのが当たり前です。だから単元を越えて繰り返し使うということが、実際に使えるようになる鍵だと思います。そうしたことを考えながら授業づくりをするというのが、私はとても大切だと思っています。

それで、皆さんご存知だと思うのですが、「小・中・高を通した英語教育強化授業：小学校オンライン・オフライン研修検証実証事業」というのが、文科省が民間に委託して現在始まっています。21の動画を公開する予定で、昨日の段階で10個の研修動画がアップされました。オンライン・オフラインの研修なんですけど、検証事業となっていて、コロナがあつたのでこれをやるということではなく、もう前年度から予定されていたものです。これからオンラインを使った研修というのが求められるのではないかとすることで、文部科学省の方が民間に委託して現在この検証事業が進んでいる。実証事業というんですかね。最終的にこれがどの程度の効果があつたかということを検証していき、それを次に生かすという事業です。実は、昨日の時点でアップされた動画があつて、それがなんと徳島県、板東小学校の坂田先生の授業でした。とてもよかったので、本当は動画をそのまま見せたいと思ったのですが、そのまま見せるとマズイかなと思うので、概略をお話します。

内容は、単元を通した言語活動のつくり方、まさしく私が今話していること、それを実現している授業でした。感動しました。解説は佐藤先生が行っていました。昨日アップロードされたばかりです。これも偶然です。まさか今日の私の講演の真似をされたとは思いませんが、たまたま昨日アップされて出てきた授業です。

このオンライン研修、指導主事を含めて全国で2700名ぐらいの先生方が視聴している事業です。本当は誰でも見られるようにしたいとは思いますが、これは英語の研修ですね。オンラインで英語を face to face で英語力を上げる研修と両輪になっているので、動画を見るのは数を増やしてもいいんだけど、オ

ンラインで英語力を上げるというところが増やすことができず、2700名という限定された視聴になっています。ぜひこれを全国の先生方に見せたいと思います。徳島県でも40名ぐらいの受講者がいてですね、40名という県に割り当てられている最高的人数です。やっぱりすごいですね、徳島の先生方は、とても熱心だなと思います。

単元計画がしっかりと練られているんです。「相手に自分や第三者のことをよく知ってもらうために、できることやできないことなどについて、聞いたり自分の考えや気持ちを含めて話したりする」ことが最終目標です。自分だけじゃないですよ、第三者のことです。結構複雑ですよ。自分のことだけなら言えるけど、相手のことも言わないといけない。ここに到達するように単元計画がつくられています。最初は練習です。練習といっても、坂田先生が自分の好きなもの、自分のできること・できないこと、まさしく自分の本当のことを話していました。そこから **can** と **can't** の意味がわかっていくということですね。ほとんど日本語が出てこないけれども、子どもたちはそれがわかっていくというプロセスでした。

そして次は、「ALTの夏休みの思い出を聞く」、あれ？**can** と **can't** の話じゃなかった？と思ったんですけど、夏休み明けということもあったんですかね、“Where did you go?”という過去形を使い、これまで学んだ既習事項を入れて、ALTが“I went to America. I went to Sacramento beach.”と言っています。

“I saw sea lions.” “Sea lions?” ということになり、子どもたちが「シーライオンズって何？」と、「マーライオンと同じ？」みたいな話になって、教室が大笑いというかね、楽しい感じになった。みんなで、これどういう意味だろう？ということを考えながらわかっていくプロセスですね。これは、単元を越える授業づくりですね。最終的に子どもたちが使えるということを目指して、この単元で扱われるものだけではなく、本当のその時期に合った対話を聞いてみる。今は100%わからないかもしれないけど、聞かせておく。そしてそのあと聞くと「あっ、なるほど」とわかるという、今求められている授業づくりです。単元を通して、あるいは単元を越えて既習表現を実際を使って見せる。練習してから使おうということじゃなくて途中でも聞かせるということでした。

第3時になると、今度は「small talk:好きな食べ物」、「Do you like salmon?’’というのが出てきました。“Yes, I like salmon. I like syabusyabu too. I ate syabusyabu yesterday.”と言っていたら、子どもから「ゆめタウンで食べたの？」という発言が出てきました。ALTの先生の話に食いついている。ああ、I likeを使うんだ、ateを使うんだ、食べたという意味だ、yesterdayか、みたいな。これが自然な言語活動を通して子どもにインプットされる。

先ほども言ったように、このインプットを通して子どもたちが推測する力が、推測できたので「ゆめタウンで食べたの？」といった話が出てくる訳ですね。“What food do you like?’’ 今度は子どもたちに振って食べ物の話をしました。単元を越えた授業づくりがなされていた。だけど **can** と **can't** もしっかりと入っているという授業でした。

これまでの授業観というのを変えないとできないですね。これまではターゲットセンテンスが先にありました。今日はこれを教える、そしてこういう導入をして、練習をさせる。坂田先生の授業はそうではなくて、本当に単元を越えつつ、しかし単元のターゲットも忘れないで入れながら最終的には“Who is he?’’にもっていくという授業でした。

途中でしっかりと知識・技能としての Guessing game という単語力を呼び覚ますというのでしょうか、必要な単語を使う。そして次はクイズで楽しみながら表現に慣れていくという活動ですね。さらに実際に学校の先生が登場して “Who is she?’’ と進めていき、「誰だろう」と考えて答える活動です。最終的には、自分のできること、できないことを紹介し合うという活動です。

そして研修動画の最後の方を見たらですね、なんと私が一番言いたかった「まずはやらせてみる、使わせてみる」ということを指導講師の佐藤先生は仰っていたんです。私は今日の言いたいことを先取りされてしまったと思って、少し残念な気持ちもありましたが、まさしく私はこのスライドを作りながら、ちょっと見てみようと思ってそのサイトに行ってみました。しかも佐藤先生は「使うことによって初めて言葉の意味を実感し、言葉が自分のものになっていくと考えます」と述べているんですね。何て言うんですか、私は今日、オンラインで講義する意味があるかなと思ったんですが、まさしくそのような授業観ですよ。それをもって授業づくりをしてきたということです。理想的な授業だったと思いました。

最後のまとめでこういうことが出てきたので紹介したのですが、01.言語活動の基盤となる学級づくり、これは私がさっき言った気持ちとつながっているということと同じですね。リラックスした雰囲気がないとコミュニケーションの授業って難しいですね。ということは担任の先生の役割が、またここでも大きいと思います。02.目的や場面、状況を明確にした魅力的なゴールの設定、最終的には自分ができること・できないこと、そして自分の友達ができること・できないことを紹介するということにもっていく。03.多様な言語活動の設定、ここはテキストを見ると can と can't が中心なんですけどね。先生の授業観でそれを打ち破るというのでしょうか。“What food do you like?” が出ていました。Do you like～?も I like～.も出ていました。I can cook.も出ていました。Who is he? も出ていました。こういうのが雑多には出てきているんですけど、場面が設定されているのでとてもわかりやすい。関連があるので推測がしやすいということですね。食べ物の話をしているので “What food do you like?” “What is your favorite food?” favorite なんかもなんとなく好きな食べ物か、というのがわかる。これは本当によい授業になっていましたね。04.まずは「やらせてみる」「使わせてみる」、これが言語活動です。やらせてみる、使わせてみる、これはもう言語活動の鍵です。これが実行できないと今回の資質・能力は身に付かないと思います。

05.「楽しさ」を実感させる、これもとても大切ですね。楽しいという気持ちが、たくさん喋りたいという気持ちを起こさせますからね。「楽しいなあ」というのもすごく大切なことだと思います。

従来の指導においては、十分に知識として理解し、練習を重ねた上で、言語活動に移っていくという指導観があったように思います。ですから、うまく言語活動ができなかった場合は、練習が足りなかったと考えて、更に練習量を増やすということがありました。

私はリバースの枠組みを使っているんですけども、言語活動を通して学ぶということはリバースの「使いながら学ぶ、学びながら使う」という指導観に転換することを求めています。この指導観に立つことが学習指導要領が求めている言語活動になると考えています。

これまでは、将来使えるようになるために、今は頑張って文法の学習をしようね。単語も覚えないとね、単語をいっぱい覚えないと、一日に 10 個ぐらい覚えて、そうじゃないと話なんかできないから、相手の言うこともわからないから、みたいな指導観で英語の授業を展開してきたのではないかと思います。これでは、やっぱりいけない。

あるシンポジウムでパネリストの 1 人から「コミュニケーションというのは英検準 1 級ぐらいじゃないと無理でしょう」と言葉を投げかけられました。小学校の先生の英語力はどのぐらいあるべきかというのがシンポジウムのテーマでした。英検準 1 級ぐらいじゃないとコミュニケーションできないという考えは、捨てないといけないと思います。先生方は、今のレベルでコミュニケーションできると思います。日本語を考えてもそうです。私も孫がいて今日 4 時頃に遊びに来るんですけど、3 歳・4 歳の子どもでもそれなりのコミュニケーションをしている。コミュニケーションをしながら、やっぱり日本語もだんだん正確性が上がっていく、語彙も増えていきます。3 級ぐらいあれば十分じゃないかと、私はその時に答えたんで

すけれど、コミュニケーションをしていくということこそが重要だと思いますね。だから子どもなりに英語を使ってコミュニケーションを体験する、ということが重要です。高いレベルに上げると誰もできません。でも、今考えると、そこに到達するまで頑張ろうというような指導観を私たちはもっていたかもしれないという気がします。

昔は英語を使う人というのは外交官とかトップ商社の一部の人とだけだと思っていましたが、今はもうそうじゃなくなってますからね。普通に様々な人と話す必要があつて、その時に使う英語というのは、もちろん高いレベルが必要だという人もいますが、多くの人、多くの子どもたちが使う英語というのはそんなに高い英語ではないと思ってもいいのではないかと思います。

つまり、体育の授業で私たちが教えている子どもたちの中からオリンピックに出るのは何人ぐらいだろうか？と考えた時に、多くの子どもたちにとって必要なのは体育を楽しむ、スポーツを楽しむ、体力づくりをするという、そのことが重要であるのと同じように、多くの子どもたちにとっても誰にとっても必要なのは、コミュニケーションを楽しむ、相手に声を掛けてあげる、粘り強く聞いてみるというような資質・能力を身に付けることが大切ではないかと思いますね。

「言語活動が学習指導要領を成功に導く鍵、言語活動を通して言語材料を学んでいくようにすることが大切」というのが前半の答えです。

ちょっと時間がなくなってきました。コミュニケーション能力とは何なのか？というような考え方が議論された70年代・80年代に、その時のことを書いています。私は、これはとてもよい論文だと思って、ずっと印象に残っています。日本の小学校英語教育を考える時によく使うものです。

例えばこういう能力があるけれども、逆三角形になっているということですね。下の方から上の方に向かって言語は習得される。で、一番最初は文法能力などはあまりない。あるのは語彙、語彙もないかもしれない。ここから始まる。だから正確性なんて求めるのがむしろおかしい。

だから、ジェスチャーを使ったりというのが学習指導要領にも書いてある。コミュニケーションが先であつて、それから文法能力とかいうのが後からついてくる。これは小学校、日本の教育現場に当てはめると、こういう風な段階を踏んで上の方に上がっていくということです。ということは、小・中・高が連携して、しっかりと自分たちの役割をお互いに了解し合うということがとても大切だと思います。「こんな間違っただけ教えられてきた」ではなくて、「間違っただけは修正されていく」という気持ちでやっていくことが大切ではないか。

そして評価も考えないといけないと思いますよね。授業の時は「good!」と言って大きな○を付けておきながら、テストになると×になるという、そうではなく評価も考え直す時に来ているのではないかと思いますね。ちょっと脱線しましたが。

評価が出てきたので、少しだけこれ面白いなあと思って今日取り上げました。先ほどから出している『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」に書いてあるものです。

【知識および技能】における「(1)英語の特徴や決まりに関する事項」に記されている「音声」の特徴を捉えて話すことについては、それ自体を観点別評価の規準とはしないが、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材を活用したり、デジタル教材等を活用したりして適切に指導を行う。これはどういうことかという、指導はするが評価はしないという考え方ですね、簡単に言えば。この考え方、これが『指導と評価の一体化』の中に書かれているんです。素敵だなと思いました。指導はするが評価はしないという、普通に考えると指導したことは評価する、なんですよね、指導したことは評価する。

ちょっとこれも脱線するんですけど、『We Can!』が世に出た時に、“I want to be ～.”だったかな。この

テキストを見たある大学の先生が「これは難しすぎる、あんなにたくさん単語が出ている」と。これは、出たものはみんな教えるというこれまでの考え方にとらわれている証拠だと思いますね。出たものは別に全部できるようになるということではなくて、指導はするけど評価はしないという、この立場に立つということが重要で、これは小学校で完結することではなく、中学校に引き継いでいくということが重要、それがこの表ですね。引き継いでいくということですね。

これは英語の特徴やきまり、音声については、だから発音とかは評価しないという訳ですね。でも教えるよ、ということです。こういう評価観が出たというのは、私はすごく面白いなあと、これはやはり変えないといけないなと思いますね。例えば、子どもが“I want new soccer ball.”と言った時、aが抜けていますが評価はしません。つまり子どもの英語をしょっちゅう直したりはしません。でも親は正確な表現をしてあげるといふ、これを繰り返す訳ですね。これが大切だということです。日本語、母語であっても、子どもの表現を私たちは直したりしたということはほとんど記憶にないのではないのでしょうか。直さないけど、指導はしていますね、間違いなく。

これは、私の友人である長崎大学の中村典生先生が話したことですが、「絵本をとぼしながら読む親はいません」ということです。つまり昔むかしあるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山へ芝刈りに…の“芝”というのがわからないから芝は飛ばして読もうなんていう人は誰もいない。芝を評価するなんてことはせずに、指導はして繰り返すということだと思いますけれども、まさしくこれが指導と評価という考え方の転換点かなと思います。

インプットは十分与えてあげる。先ほどの坂田先生の例にもありましたけど、インプットはどんどんあげていく。これを完璧にわかるということは、今は求めなくてもいい。あるいは言えなくてもいい、理解のレベルに留めてもいい、というような考え方で指導はしていくということが重要であるということです。

学習指導要領には「受容と発信の区別」というのが新たに取り入れられています。これまでは本当に中学校の授業とか見ていたら、高校もそうですけど、先生がわざわざ教科書に出ている難しい単語を「これはテストに出るからね、覚えておけ」と言ったりします。難しい単語だから日常ではあまり使わないと思うんですけどね。でも、それをテストに出すとかね。

でも、それって必ずしもわからなくても理解できればいい話で、日本語で言えば薔薇という漢字とかです。躊躇する、躊躇うとかです。ああいうのは、見たらわかるけど書けるかという自信がない。ですから受容と発信の間には相当ギャップがあるんですが、それを無視してこれまでは英語の教科書などを扱ってきたのではないかと思います。

テストもそうですね、「評価（テスト）と聞いて思い出すこと…」と書いてありますけどね、私が中学校の頃は何が出るかわからないので不安だった。皆さんどうでしたかね。「先生、テストに何が出ますか？」と聞いても、教えてくれることはない。何が出るのか、だから予想してテストの山掛けをする。山が当たった、山が外れたというのが、テストの後の話題の中心でした。

席次が渡され、自分も頑張ったけれど、自分よりできる人がいると、いつも順位は下の方、テストを返されても自分の何が悪かったのか、次はどう努力すれば良いかもわからない。こういう不安を与えるような評価ではいけないと思いますね。

そうではなく、指導をしながら評価して、評価しながら指導をするという形成的評価の考え方が、今回の『指導と評価の一体化』の参考資料を見ると、とてもよくわかりますね。やっぱりこうして指導観・評価観を変えないといけない。「指導が学習者のためのものならば、評価も学習者のためのもの！」でなければならぬと強く思いました。

時間があと1分になってしまいましたけど、私の勤めている琉球大学の附属小学校の先生方と、私は毎週1回の勉強会をずっと重ねてきているんですけど、この先生の授業で評価基準を共有するという場面に出くわしました。子どもと一緒に、「パフォーマンス評価を夏休みの前にやるよ。どのように評価したらいいのかな」と話し合いをしているのですね。「どのように伝えたら“充実する夏休み”が伝わるかな」と。「たくさんやりたいことを伝えるのもいいけど、1つやりたいことを言って理由をしっかりと伝えれば、伝わると思う」とか「できるだけ具体的にやることを挙げた方がいい」とか、子どもたちがそれを話し合っているんです。

それを見ながら、「じゃあそのように評価するからね、でもね、いつもやっていることだよ。授業でやっていることがインタビューテストになるからね」と言って終わりました。つまり授業でやっていることが評価されると言いますかね。だから子どもたちはテストに何が出るか、不安になるということがないということですね。手前味噌になって申し訳ないんですけども、そういう評価観も大切かなと思います。

時間が来てしまいました。「コミュニケーションを経験することで、その結果として言語の構造または機能に気が付く」、使いながら学ぶということです。そして自分で考えながら「創造的に言葉を使っている」ということが大切なのです。授業をする時に「言葉を通して他者とつながる社会的な存在として捉えることを意味する」という、村野井先生の言葉ですね。目の前にいる子どもたちが、どういう風に言葉を使っていくのか、何のために使っていくのかということ考えた時に、この授業はどこの方向に行くかということが決まっていくということですね。他者とつながる、社会的な存在になる。そこを考えれば、そのような授業になるはずで、それは先ほど述べた学習指導要領でも述べていることです。

これは私が最後にいつも言っていることですが、英語教師ということをやめて、コミュニケーションを教える教師、コミュニケーションが目的なんだから「英語コミュニケーション教師」として考えて、やっていきたい。ちょっと長いので“英コ教師”と短くして、自分たちは英コ教師なんだ。英語じゃないですよ、コミュニケーションを教える、そんな教師なんだよということですね、教師が意識改革をすることが重要だと思います。2分ほど過ぎてしまいました。どうもありがとうございました。